

私の中の地獄 武田泰淳

私の中の地獄

昭和四十七年四月二十七日 第一刷発行
昭和四十七年七月二十日 第三刷発行

著 者 武 田 泰 淳

発行者 井 上 達 三

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話 東京(三)七六五二(代表)
振替 東京 四 一一 二三
郵便番号 一〇一—九一

印刷 明 和 印 刷
製本 協和製本株式会社

装幀 中 島 かほる

目次

I

私の中の地獄	5
私にとって宗教とは何か	52
文学と仏教	61
現代は罰せられている	76
宗教は統一できるか	89

II

泰淳日本行脚	95
最澄	192
「往生要集」の虫	207
大拙先生の問答	214

III

誤解の効用	225
勇気あることば	241
友は離れているもの	243
男性と女性と	245
戦争と私	248
わが心の風土	252
法隆寺展を見て	255
対談・いのちの歴史 (宗正元・武田泰淳)	259

私の中の地獄

私の中の地獄

一

地獄を知りつくすことは、できない。

地獄の地獄性は、それほどかぎりがないものである。ここまでが地獄、これが地獄の本質と、簡単にとり出して見せることができるくらいなら、それは「地獄」とは言えない。

宗教が解説する地獄ばかりではない。宗教そのものまでが、落ちこんでいる地獄がある。

あたり一面、地獄がみちみちていたから、地球上どこへ行っても宗教の無い場所はなかった。地獄からの救い。それを求める人間が、宗教を生み出した。これを言いかえれば、地獄をふりすててしまえば、この世に宗教は存在できなくなるという予感につながる。

地獄ヌキの宗教は、もしかしたらアルコール分ゼロの酒。塩からくない塩のごときものかも知れないのである。

「地獄」とは、何か。人間の苦悩のすべてである。したがって、いかに世間知らずの私でも、その一部を目撃し、あるいは感得している。ほんの一部、語るに足らぬほどわずかではあるが、知らないとは答えられない。よく知っていると言えばウソになるが、まるで知らないと言うことも、いつわりに

なる。苦悩の全貌をつかむことなど、私にできるはずがないのだが、いかなる名僧智識も、人類の苦悩の全貌を目撃し感得することは不可能なのであるから、宗教上の指導者たちもまた、地獄について完全に知り得てはいないはずである。

もちろん、すぐれた聖識者、信仰者は、私の数倍、数百倍も人間の不幸について知っているにちがいない。さもなければ、彼らは信徒たちに、宗教的に語りかけることができないからだ。地獄、苦悩、不幸について真に知っていることが、彼らを彼らたらしめる最初の資格である。

つまずきがある。壁がある。矛盾がある。絶望がある。迷いがある。くらやみがある。疑いがある。自分および他人に対する、許しがたい裏切りがある。みにくさがある。汚れがある。弱さがある。競争がある。攻撃がある。抹殺がある。地球上の総人口、生きとし生けるものに平等にわちあたえられている、この地獄的要素の、すべてをすっかりひきうけることの困難は、なんと巨大なものであるうか。

この困難の第一歩は、いかなる聖者も、これらの暗い重荷のぜんぶに気づく、ぜんぶを自覚すること、まずできないことにある。まして凡人たる我々には、重大な人類の不幸の大部分を見のがしてしまう、無視してしまう、感覚できないという習性がある。

自分の知らない他人の不幸について、同情することができだろうか。自分が目撃も感得もできない苦悩から「愛」や「慈悲」をみちびき出すことができるであろうか。

ある種の地獄については、ずばぬけた専門家でありながら、別種の地獄については、全く盲目である宗教人だって、たくさんいる。それは決して彼らが、無知だとか偏狭だとか、彼らが不完全な人間

であるとかいう理由から、そうなるのではない。彼らが人間であること。結局のところ人間以外の何物でもありえないこと、そのことが、彼らの地獄学、地獄観、地獄感覚を、小さな、限られた、不充
分なものにせざるを得ないのである。

地獄について、たいして知ってもいないくせに、知りつくしてやるような顔つきをしなければ商売が成り立たない点において、文学者と宗教者は同類である。

何一つ発言できないで死んで行つた、多くの人々。その人々こそ、真に地獄を知っていたのかも知れない。地獄のまつただなかにいながら、沈黙したまま消滅した人々がいた。

一方では、あまり知らないでも、地獄についてしゃべりつづける者がいる。(私などは、その仲間の中の、もっとも悪質な一人だろう)。

戦争。たとえば、この代表的地獄現象について語ろうとするとき、いくら軽薄な私でも、そうなめらかに声が出てこない。身のほど知らずに、大げさな言い方をしたにしろ、また、いくら巧みにごまかしたにしろ、地獄の方が、こっちを見ぬいてしまうからである。

地獄が私たちを試し、裁く。そのやり方で、戦争は私たちを試し、裁く。「地獄なんか、大きらいだ。ジゴク反対!」と、いかに叫ぼうと、それで地獄がどこか遠くへ行ってくれるわけではない。戦争のおそろしさを知るものは、地獄のおそろしさを知るものである。

戦争について地獄について、深くひろく考えつくす人は、すでに宗教の分野に、足をふみ入れている人である。だが……。だが、地獄反対、戦争反対の人々が、そのままそっくり宗教的ではあり得ない。そこに、われわれの、あいまいさ、不徹底がある。

「殺スナカレ」。すべての宗教は、条件の第一、誓約のはじまり、もっとも初歩的な戒として、これを説く。しかし「殺サナイ戦争」なるものは、史上かつてあったためしはない。歴史をもつわれわれは「殺シタ人類」の子孫である。そして、人類は今の今、ヒトを殺しつつある。したがって、われわれは破戒者として、誓約にそむいた者として、この世に生まれ、かつ生きつつけている。

二

僧侶は死体に接近する。死者の横たわる家に行き、そこで経を読む。死体の消滅したあとでも、死者の追憶のために、読経の声を張りあげる。

医師と同じように、死体は僧侶にとって、ちかしいものである。

しかし、いくらなれしたしんでいるにしろ、宗教人にとっても、死体は好ましいものではない。生きている人間と、死んだ人間とは、全く別のものである。死体はもはやピクリとも動かず、一言も口をきかない。そして腐り、悪臭をはなつ。

できるだけ早く焼きつくし、残された骨も埋めなければならない。生者にとっては、たとえそれが最愛の人の死体であっても、困った物である。人間の死体は、すでにヒトではなくて物体なのであるから、いくら傍に置いたところで、生者とは無関係になる。

ぼくらは極悪人とでも、一しよに暮すことができる。だが、死体とだけは同居をつづけることができない。

死体を大切に扱うのは、死ぬ前の「そのひと」を大切にするのであって、死体そのものには、

どう取り扱われようと、感覚は無い。したがって、死体を愛することができなくても、それで「その人」を愛さないことにはならない。

死体を愛することは、だれにも不可能である。だれからも愛されることが全く不可能なモノになること。それが、人間の行きつく一点である。

私の伯父Wは、大正新修大蔵經を監修した、有名な学僧であった。彼は、檀家の婦女に人気のある美丈夫であったが、一生、独身で通した。純粹の独身であることが、一そう彼の人気を高めた。

私は、彼の死体の解剖に立ち会った。彼が、十年を越えるドイツ留学中に、知り合った医師の一人にA青年があった。彼はA青年と酒をくみかわしたある夜、「日本では解剖用の死体が不足しているそうだな。もしぼくが死んだら、君の手で解剖してくれたまえ」「よろしい、ひきうけたよ」「解剖がすんだら、みんなで一杯やってくれたまえ」「よろしい」と約束した。やがてWは浄土宗の指導者となり、Aは世界的学者となった。

Wの死が報道されると、A博士は伯父の渡した約束状を持って、伯父の寺へ駆けつけた。元気のいい達筆でしるされた約束状を示されたのでは、遺族も反対できない。伯父の妹二人は、兄の死体の切りさかれるのを見たくないので、東大病院の外科へ行かなかった。まだ僧侶の資格を持たぬ私が、遺族として付いて行った。

解剖室の床には、たえず水が流れていた。頭の皮がむかれるときは、黒い絨氈じゅうたんをへがすようだった。ノミで頭の骨を打ちわる音も、ひびく。日本人にしては白い皮膚は、脂肪分の多い肉をつつんで張り切っている。大脳や小脳は、とりだされて目方をはかれた。さまざまの内臓の、さまざまな色

彩も、目を打った。

ゴムのチューブのような腸が、すばやい医師の手さばきでしごかれると、中につまったガスがしぼり出される。そして、悪臭がただよった。切開する時と同じように、縫い合わせる時も、きわめて順序よく事務的だった。

脳髓を失ったあとの顔つき。ハラワタを除去されて詰め物をされた腹部。みんな、解剖前のかたちをしていた。同行した従兄が、貧血して倒れかかった。

A博士は礼儀正しく、しまいまで親友の死体の始末に付き添っていて下さった。

(このA博士は、井上靖夫人のお父さんである。私が「約束の身体」という短篇を書いたとき、それを読んだ井上氏が教えて下さったので、それがわかった)。

若い私にとっても、自分の好きだった伯父の死体の、解剖を目撃するのは苦しかった。だが、すべてを見おわって、伯父の寺へ死体(中みがカラッポになった)を送りとどけるさい、私は一種の喜びを味わっていたのではなからうか。貧血を起したりしないで、無事に見とどけたこと。人間の死体とはいかなるモノであるか、はじめて知りつくすことができたこと。しかも、非情のようではあるが、そこまで見とどけ、知りつくすことが仏教の哲理につながっていること。

寝棺と一しよに揺られて行く車の中で、私が感じていたその感情を、「一種の喜び」と表現するのを、できることなら私は避けた。しかし、たしかに、何かを発見したという喜びがあって、それが敬愛する人の死を悲しむ心を、おおいかくそうとしていたのである。

今、こうやって、死体について語っている私にも、その時のような非情な、少しく意地のわるい喜

びがつきまとはいいないだろうか。もしそうだとしたら、その語り方が、それでも宗教的と言えるだろうか。それとも、反宗教的と言うべきなのだろうか。

三

レントゲン写真機でうつされた、人間の肉体の映画があった。

美女の肉体が透きとおって、骨だけが黒くうつし出される。椅子に腰かけたり、煙草を吸ったりする。彼女の骸骨は、美しくない。「これが美しい女体の骨なのだ」と、いくら思おうとしても不可能である。

なまめかしい下着やストッキング。男をなやます眼、赤いくちびる。肉のふくらみ、肉のうごめきは、画面にはあらわれない。動くのは、生きている彼女のホネだけである。

彼女は、まさに生きている。だが、肉を失った彼女の身体は、死体のように見える。いや、死んだばかりの死体より、もっと奇怪に見える。

もしもレントゲン・カメラのごとき視力を持っていたら、あらゆる女体は、黒い鉄骨の結合のように見えるだろう。オトコにとって、オンナが美しい生物であるのは、私たちが透視用レンズではなくて、平凡な眼をもっているからである。眼ばかりではない。眼、耳、鼻、舌、心、意。すべての感覚と感情が、オンナを美しいものにしてくれる。

私たちは、生まれながらにしてあたえられた眼で、女をながめる。全く別種のレンズ、あまりにも科学的な眼鏡をかけてながめるようになったら、どうなるだろうか。おそらく恋愛も結婚も成立せず

に、子孫をつくれぬ人類は絶滅するだろう。

オンナ（あるいはオトコ）が、美しく見えなくなったら？ もちろん、そんな心配はない。むしろ、美しく見えすぎるのが心配なくらいだ。「男ってすばらしいわ」「女はいいなあ」。全人類は毎日のように、そう合唱している。「男っていやなものねえ」「女なんて、どうせそんなものさ」という不調和音がまじっているにしても、合唱は次から次へ歌いつがれて、おとろえることはない。

彼ら、彼女らが、オンナやオトコの死体がたまらなくらいなのは、生きているオンナやオトコの肉体が好きでたまらないからである。肉体万歳！ 死体反対！ 「好きよ」「きらいだよ」のすべての判断は、肉色のニクに関係しているのであって、不吉に白いホネのことは考えまい、忘れようとしているのである。

「どうしておれは、こんなにまで女が好きなのだろうか」

死体や白骨の方へ専心しようと努力したさい、何よりもはげしく私をしめつけたのは、この苦痛であった。男にとって女は、生の象徴、生の根源、生そのものなのであるから、ただたんに好きだ、好きでたまらないですましてしまったのでは、仏教の必要はどこにあるのか。寺にこもうとした私を、ひるも夜も息ぐるしくさせたのは、この一点であった。

少年のころから「性欲とは我慢できるものではない」という考えに、まといつかれていた。手淫を開始したのが、小学五年生のときである。授業中に「こら、タケダ。何をやっているのか」としかられたことがある。

ターザンの映画。それもワイズミュラア（水泳選手）主演ではなく、もっと野蛮人めいた男の扮し

たターザン。彼が裸でしばらくてもがいている場面が気に入って、寝床の中でそのまねをしているうちに、不可思議な快感をおぼえた。

それ以来、私にとって性欲とは、何よりもまず隠すべきものとなった。男女共学の学級もあって、オンナ小学生とは一しよに遊び、一しよに話しあったが、彼女たちに特別、性欲を感じたおぼえはない。いたずらっ子が好んで絵にする、あの性器のかたちも、私はきらいだった。友だちが示す性欲の表現は、すべて下品に思われた。

性欲を下品と考えるのは、とんでもないまちがいである。しかし、ほめたたえるべきものであるかどうか。それは今だに私にはわからない。女性がほんとうに好きならば、女性の肉体の一部分だけ下品だと考えるわけにはいかない。もし、女神が神聖なものとするならば、彼女のあらゆる部分は神聖でなければならない。

子供の私にとって、オンナの子は神聖でもなければ、下品でもなかった。ただ下品なのは、私自身の性欲。その性欲の持ち方にあったのらしい。

この少年時代からの特殊感覚のせいで、私はとても産婦人科や下半身の病気の医者には、なれそうにない。性欲の行きつくところについて、とことんまで考えつくすのが、何となくおそろしい。どうせ好きな女体ならば、探査研究するのが正しいではないかと言われても、どうも、それが私の任ではないような気がする。

下品から脱出するには、どうしたらいいか。まず、自己の下品さを秘密にしなければならない。できるだけ、上品がること。それよりほかに方法はない。

四

子は、父について語りにくい。

それは、父がオトコであるからだ。

子はまた、母について語りにくい。それは、母がオンナであるからだ。

父も母も、衰弱し、そして死ぬ。子は、それをながめる。しかもその場合、子は衰弱して死ぬオトコである父、衰弱して死ぬオンナである母をながめつけねばならない。

父は、好男子ではなかった。母は、美女であった。今あらためて、二人のちがいを思い起こすけれども、子としての私にとっては、お父さんはお父さん、お母さんはお母さんであって、彼と彼女が男や美女であろうが、なかりうが、そんなことを深く心にとどめたことはない。

私は大体、父と母との結合を、男女セックスの結びつきと感じたことはない。と言うより、感じたがらなかったと言った方がいいかも知れない。セックスの味をおぼえはじめた小学生、中学生、高校生、の全期間を通じて、チチとハハとのあいだの愛情を、オトコとオンナのあいだの性欲として感じることはできなかった。

たしかに、これは異常なこと、おかしい状態である。寺で生まれ、寺で育ったから、そうなったのか。父の男臭、母の女臭をかきつけることなく、両親を両親としてだけ見ていたことは、性に対する私の無神経のせいだったのだろうか。あまりにも父を男として、母を女として実感してしまうより、その方がよかったとは思っても。